

らせるんです。

伊與田 なるほど。

竹村 飛龍は自分が歩んだプロセスが分かっていきますので、最初の頃は周囲に感謝しながら注意深く、慎独しながら進みます。しかしある期間が過ぎると、物事があまりにうまくいくので優秀な龍であればあるほど知らず知らずのうちに驕り高ぶった龍になっていきます。ふと気がつくとき陰、つまり雲たちはもうついてこれなくなっている。

雲を呼んで雨を降らせるのが本来の龍の役割でした。これが失敗する龍だったら周囲も忠告できるんですが、あまりに優秀で見事に役割をこなすものだから、陰は離れていってしまい、ハッと気がついた時には雲はずっと下のほうにあつて、雨を降らせない龍になつてしまっているんです。裸の王様で、誰も注意してくれない。役割を果たせないまま龍は失墜していくわけですね。

伊與田 「乾為天」の「亢龍悔いあり」とはそういうことですね。

竹村 ええ。「易経」はいろいろなところで急激な変化による禍は人災である、緩やかな変化が本当の循環であり時の流れであると説いています。です

から亢龍にならないために、飛龍の段階で陰を生じさせていく必要性が書かれてあるんです。

一つには「乾為天」にある

「大人を見るに利ろし」

という言葉があげられます。大人を探し出して学びなさいということ、諫言でもマイナスの情報でも自分以外のすべての人の声に謙虚に耳を傾けること。これが陰を生じさせていくことになるわけです。独りを慎むということも陰の要素です。

自分の力を發揮するのは陽、人を育てるのは陰です。経営者であれば後継者や若い人を育てるのも大事になってくると思います。そして器量を發揮するのは陽の力で度量を保つのは陰の力です。このように陽がどんどん強くなつていく飛龍にとって一番大事なことは陰をいかに自分の中で生みだしていくかです。そうすれば飛龍として雲を呼び雨を降らせることができるんです。

これからの時代に求められる陰の徳

竹村 あとは伊與田先生、足らざるを補足していただけませんか。

伊與田 いや、竹村先生の話を聞きながら僕はほとんど感銘を受けています。龍の話をよくもあれだけ現実

に即しながら説かれたものだと思いませんか。僕のほうから特別に補足することはありませんが、この次はやはり陰の徳ということも深く研究なさってはいかがかと感じました。

竹村 ああ、「坤為地」のことですね。

「乾為天」と対になっている……。

その中には例えば、
「霜を覆みて堅氷至る」

という言葉もあります。晩秋の早朝に庭に出てみたら霜がかかっていた。その霜を見た瞬間に「これは踏んだらすぐに消える霜だけれども、やがては厚い氷になるんだ」と兆しを読み取っていく、といった教えが書かれてありますね。

伊與田 はい。そういうことを取り合わせてお説きになったらいいのではないかと。特に東洋思想は陽よりも陰を重んずるところがありますからね。陽に走りがちな現代人を調和させるブレーキ役としても、未来に向けてとても大切だと思うんです。

竹村 私は「老子」が大好きなのですが、その中に「合神、死せず」とあるんです。子どもを産み育てる女性のように、万物を育む天地造化の働きは永遠に続くと言われています。易を学ぶうちに、これはまさに陰のよさが発

揮された「坤為地」そのものだと思うようになりました。

それで龍の変遷の話では、私は目立たずに静かに力を蓄えている潜龍が一番好きなんです。潜龍が一番可能性に満ちていて、どの成長過程にあつても必ず潜龍に戻らなくてはと自分を戒めています。だからいつも潜龍元年だと思つています。

伊與田 おっしゃるとおり陰はとても大切です。宇宙を示す「乾坤」という言葉があるように、陽(乾陰(坤))は一つで、万物はそこから発生するわけです。純粹な陽、純粹な陰というものはありません。易には陰陽の両面があり、「乾為天」と比べて陰により焦点を置いているのが「坤為地」なんですね。

竹村 確かに「乾為天」が全部陽の交で成り立っているのに対して「坤為地」は反対にすべて陰の交で成り立っています。

先生からとても難しいテーマをいただきました。実は私もそれをやりたいくて何年も前から一所懸命研究しているんです。でも龍の動きが元になっている「乾為天」と違つて「坤為地」はイメージを膨らませにくい面がありますので、なかなか苦勞しています。先生